次代へつなぐ伊勢の魂　伊勢御遷宮委員会 広報紙 第10号／令和2年1月5日発行

伊勢のごせんぐう

編集発行・伊勢御遷宮委員会
伊勢市岩渕1-7-17(伊勢商工会議所内)
電話0596-25-5215

「伊勢 神話への旅」ホームページ
http://www.isesengu.jp

令和祈念行事

祈りと承継

大嘗祭を奉祝して 神宮参拝

令和の御遷宮へとつなぐ 伊勢のこころ

皇居内大嘗宮にて天皇陛下一代一度の儀式「大嘗祭」が行われた令和元年11月14日。その日、神宮では大嘗祭の無事を祈る「大嘗祭当日祭」が営まれ、また皇居からの勅使により奉幣の儀が執り行われました。

伊勢御遷宮委員会では、この大嘗祭の日に、奉祝の意を込め伊勢の地から令和の御代の平和、安寧を祈念する「令和祈念行事」を実施。御遷宮に関わる伊勢の民俗行事「お木曳」をはじめ、神宮とともにある伊勢のまちを次世代へつなげる活動の一環として、伊勢市内の奉献団、それに準じる町会などの皆様にお声がけして、多くの方にご参加いただきました。

当日は内宮領、外宮領両地域あわせて49団にご参加いただき、委員会の役員、関係者を含め230名が、内宮参集殿に集合。正装にそれぞれ半被をまとい、参道を揃って進み、神楽奉納の後、特別参拝をしました。

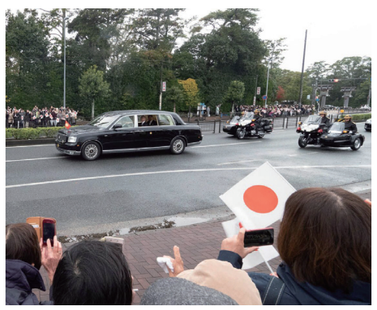
伊勢の民として、皇室と神宮について、伊勢の歴史について、より一層理解を深め、そして次回「令和の御遷宮」を無事に迎えられることを目標として、このようなまちの伝統を継承する機運を高める機会を重ねていきたいと思います。

当日の様子をご覧いただけます
◆写真ギャラリー

天皇、皇后両陛下 神宮 御親謁

11月21日には、御大礼の一環であり即位礼と大嘗祭を終えられたことを天照大御神にご奉告する「御親謁」のため天皇皇后両陛下がご来勢され、皇位継承の象徴とされる「三種の神器」が伊勢に揃いました。御大礼でしかみることのない特別な装束や仕様で「親謁の儀」に向かわれる両陛下の様子が各種報道により伊勢から全国に届けられました。

伊勢では、到着された21日の夕刻に市民約1500名による提灯行列も行われ、宇治山田駅や内宮、外宮への移動時の沿道に市民のみならず多くの人が足を運び、23日午後にお帰りになるまで奉祝・奉迎に沸きました。

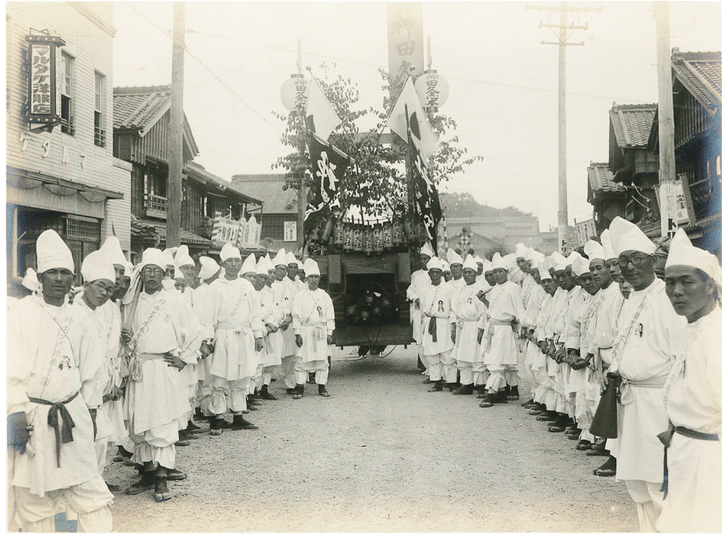


伊勢の伝統文化を伝える

昔の一枚

伊勢の民俗行事 お木曳（ひき）

500年以上の歴史がある伝統行事「お木曳」。
神宮にご用材を運び入れる労役を起源とする伊勢ならではの特別な民俗行事です。



神田久志本（現在の神久社）奉曳団　陸曳

昭和のお木曳（戦中）

「お木曳」は、様々な時代背景のもとで実施されてきました。

第59回御遷宮のお木曳は、昭和24年に予定されていた式年遷宮をひかえて、戦時下の17、18年に挙行されました。当時御遷宮は国事の一環でしたが、戦争が徐々に激しくなってきたこの頃、民俗行事の実施には困難がともない、一部の奉曳の中止、規模縮小はやむを得ないものでした。それでも第一次奉曳の川曳は2日間で20団が参加、陸曳は6日間でのべ108団が奉仕しました。

戦争一色の時局で物資統制もあったため、全奉曳団は半被姿ではなく古代式の白い烏帽子や浄衣で統一。わずかに帯と襷で色分けした衣装での奉曳となりましたが、9万人余りが参加。意気盛んに伝統行事を遂行する様子が写真に残されています。第二次奉曳は、より戦火厳しく、中心となる若者は出征者が相次ぎ、空襲の危険が迫りくるさなかの実施であったことも伊勢の歴史として憶えておきたい逸話です。

昭和20年に終戦。その後、制度改革があり危ぶまれた第59回式年遷宮は、予定より4年遅れの昭和28年に叶いました。こうして受け継がれてきた伝統を、平和な世に未来へと継承していける喜びを感じずに入られません。

二見地区の奉曳団　川曳

●知っておきたい伊勢のこと

国から民へ。明治から戦後の御遷宮、お木曳

御遷宮は、古来より国家の最大重儀であり、武家時代には幕府が中心となり行われました。明治になり、国費によって御遷宮が行われるようになりました。

神宮への労役としてはじまったお木曳も、明治期からは実質的には不要となりましたが、地元の民（旧神領民）の敬神の思いは強く、ご奉仕の継続を請願したことで、現代へと続く御遷宮に伴う民俗行事として確立していきます。

戦後、国費によるご造営は望めなくなりましたが、日本全国の崇敬者から奉献される浄財をもって式年遷宮は継続されることとなりました。

次のお木曳行事 予定

令和7年　御樋代木奉曳式
令和8年　第一次お木曳行事
令和9年　第二次お木曳行事

※一連の行事開催年は前例を反映した予定です。